

論文の内容の要旨

論文題目 Longitudinal effects of work-family spillover on psychological distress among Japanese dual-earner couples with preschool children: Dyadic data analysis using multilevel models

(未就学児を持つ共働き夫婦におけるワーク・ライフ・バランスの精神的健康影響：

夫婦間の関連を考慮したマルチレベルモデルによる検討)

申請者氏名 瀬戸 (島田) 恭子

【目的】共働き世帯の増加などにより、日本の産業保健分野においてもワーク・ライフ・バランスの健康影響に関する知見の蓄積が求められている。これまでのワーク・ライフ・バランスと精神的健康に関する研究では、横断研究が多く、「仕事と家庭役割間のネガティブな流出(スピルオーバー)」が主に注目され、「両役割間のポジティブなスピルオーバー」を考慮した研究は少なかった。また研究の多くが欧米を中心に行われてきた。そこで本研究は、両役割間のネガティブおよびポジティブなスピルオーバーが心理的ストレス反応に与える影響を、日本人の縦断データを用いて検討することを目的とした。

【方法】ベースライン調査(T1：2008年11月)は都内某区の保育園に子どもを通わせる共働き夫婦を対象に実施され、2,992名が回答した。フォローアップ調査(T2：2010年1月)は、T1調査時にT2調査への参加に同意した1,466名を対象に実施され、963名が回答した(追跡率65.7%)。本研究では、両調査での有効回答者894名(男性394名、女性500名)を分析対象とした。解析はまず、心理的ストレス反応(T2)を従属変数とし、以下のステップで独立変数を追加投入する階層的重回帰分析を男女別に行った。ステップ1：基本属性(年齢、婚姻状況、子どもの数、末子年齢、職種、雇用形態；すべてT1)、ステップ2：心理的ストレス反応(T1)、ステップ3：仕事領域変数(T1：量的負担、裁量権、サポート)、ステップ4：家庭領域変数(T1：量的負担、裁量権、サポート)、ステップ5：ワーク・ライフ・バランス変数(T1：仕事から家庭へのネガティブ・スピルオーバー、家庭から仕事へのネガティブ・スピルオーバー、仕事から家庭へのポジティブ・スピルオーバー、家庭から仕事

へのポジティブ・スピルオーバー)。次に同じ独立変数・従属変数について、夫婦間の相関を考慮したマルチレベル分析を行った。さらにそれぞれの変数における T1-T2 の変化量を算出し、心理的ストレス反応の変化量と、各独立変数の変化量との関連を、夫婦間の相関を考慮したマルチレベル分析で検討した。

【結果】階層的重回帰分析の結果において、男性では、仕事→家庭へのネガティブ・スピルオーバー (T1)が、心理的ストレス反応 (T2)と正の関連を示していた一方で、女性においては、どのスピルオーバーも有意な関連を示さず、家庭での量的負担 (T1)が正の関連を、家庭での裁量権 (T1)が負の関連を示していた。T2 の心理的ストレス反応におけるマルチレベル分析では、男性の仕事→家庭へのネガティブ・スピルオーバー (T1)が正の、女性の仕事→家庭へのポジティブ・スピルオーバー (T1)が負の関連を有していた。同時に女性の家庭での量的負担が正の、家庭での裁量権が負の関連を示した。T1-T2 の変化量に関するマルチレベル分析では、男女ともにネガティブ・スピルオーバー (仕事⇄家庭, 双方向) および仕事のサポートが、心理的ストレス反応の変化量と有意な関連を示した。女性のみで仕事→家庭へのポジティブ・スピルオーバーが心理的ストレス反応の変化量と有意な負の関連を示した。

【考察】階層的重回帰分析およびマルチレベル分析において、男性では仕事から家庭へのネガティブなスピルオーバーが1年後の心理的ストレス反応の高さに関連している一方、女性では家庭の量的負担や裁量権が1年後の心理的ストレス反応に関連していた。これは本研究の対象者の特徴である、未就学児を持ちながら夫婦で働いていることを反映した結果と言える。伝統的な性役割分業意識が残っている日本において、共働きで未就学児を育てる場合、女性に家庭役割が偏り、1年後の精神的健康を悪化させる可能性が考えられる。また働き盛り男性の長時間労働が特徴的なわが国において、男性にとっても、育児や家事に参加したいが仕事のせいでできない葛藤が1年後の精神的健康に悪影響を及ぼす可能性が考えられた。なおマルチレベル分析では、ポジティブ・スピルオーバーが女性においてのみ、仕事→家庭方向で心理的ストレス反応と有意な負の関連を示していた。働く母親にとって、仕事を持つことによる家庭役割への効用が、1年後の心理的ストレス反応を低

減させる可能性が示唆された。比較的富裕層の多い本研究の対象世帯では、必要に迫られるというより自発的に母親が仕事をしている可能性があり、仕事→家庭へのポジティブ・スピルオーバーが1年後の心理的ストレス反応の低下につながりやすい可能性が考えられた。

【結論】 日本の未就学児を持つ共働き夫婦の精神的健康に関連する要因は、男女別に異なる可能性が示唆された。ワーク・ライフ・バランス変数では、男性において仕事→家庭へのネガティブ・スピルオーバーが心理的ストレス反応の増加に、女性においては仕事→家庭へのポジティブ・スピルオーバーが心理的ストレス反応の低減に、関連している可能性が示唆された。